

〔資料〕

## 妙幢淨慧撰『佛神感應錄』翻刻と解題(六)

阿部美香・大久保美玲・塚本あゆみ・関口静雄

### 〔解題〕

#### 淨慧の周縁⑤

妙幢淨慧は照山元瑤(玄瑤)すなわち臨濟宗聖明山林丘寺を開山した後水尾院皇女朱宮光子内親王(一六三四―一七二七)と交流があった。淨慧と元瑤に交流があり、当代における元瑤の人的交流が相当広いものであったことは夙く西田耕三氏『近世の僧と文学―妙は唯その人に存す』(二〇一〇年<sup>社</sup>)が指摘せられたことで、小稿はその大切な教示に導かれた。

内大臣洞院満季撰『本朝皇胤紹運録』(群書類従第五輯所収。一九八七年五月、訂正三版第六刷。統群書類従完成会)

後水尾天皇(一五九六―一六八〇)の後胤を三十二人挙げ、第八皇女朱宮についてその履歴を極めて簡素に伝えている。

林丘寺  
光子内親王 法名玄瑤  
母逢春門院

寛永十一年七月一日誕生。稱<sup>二</sup>朱宮<sup>一</sup>。延寶八年九月十九日落飾。<sup>四十</sup>依<sup>二</sup>父帝

崩<sup>一</sup>也。戒師天龍寺天外長老。天和二年於<sup>二</sup>修學寺村<sup>一</sup>建<sup>二</sup>立觀音堂<sup>一</sup>。號<sup>二</sup>聖

明山林丘寺<sup>一</sup>。享保十二年十月五日薨。<sup>九十七</sup>葬<sup>二</sup>于<sup>一</sup>一乘寺村葉山<sup>一</sup>。號<sup>二</sup>

普明院宮<sup>一</sup>

照山元瑤は落飾後の法名であるが、彼女を呼ぶに光子内親王・林丘寺法内親王・朱宮・緋宮・普明院宮・林丘寺宮とさまざまで、また林丘寺は音羽御所とも称された。宮内庁書陵部蔵宝永六年(一七〇九)十二月守拙齋明山撰『林丘寺法内親王行業記』(以下『行業記』)によると、誕生するや後水尾院は「紫微宮之詩」から一字を採って「緋宮」とみずから書された

という。緋宮の生母隆子(一六〇四―一六八五)は贈左大臣四条家櫛笥隆致の娘で後宮に出仕して勾当内侍・御匣殿・四条局と称し、退位後の後水尾院との間に理昌女王(八重宮)・後西天皇・八条宮穩仁親王・光子内親王・理忠女王など六男四女を儲け、歿直前に逢春門院の女院号を受けた。

生母が女官であったから、通例であれば緋宮は内親王の宣下を受けることもなく比丘尼御所で生涯を終えるはずであったが、『行業記』によれば氣質明敏天資順孝の由を以て、父帝の中宮東福門院(徳川和子)の鍾愛厚遇を受けて養女となり、数え五歳を迎え深曾木の儀が行われた寛永十五年(一六三八)十二月二日、光子内親王の宣下を賜ったと伝える。五撰家筆頭近衛家当主近衛基熙(正室は後水尾院皇女常子内親王)の『応円満院基熙記』に、明暦初年二十二、三歳のころ、徳川四代将軍家綱(十五、六歳)との縁談が持ち上がったが後水尾院らが了承せず実現しなかったという。

後水尾院は寛永六年(一六二九)三十四歳で讓位してのち禅宗に帰依して萬年山相国寺听叔顛暉、瑞石山永源寺一絲文守、その師龍宝山大徳寺沢庵宗彭、北山鹿苑寺鳳林承章、正法山妙心寺の雲居希膺・愚堂東寔・龍溪性潜らに禅要を学んで落飾の志を抱き、慶安四年(一六五二)五月六日夜、听叔顛暉を戒師として広御所で突然落飾し、道号円淨、法諱道覚を称する法体となった。五十六歳の時である。『近衛尚嗣公記』(尚嗣は基熙の父。正室は後水尾院皇女二宮)によれば、余りに俄かの落飾であったのである。それは略儀で行われ、臨席の公卿はなく、立会の公家は前摂政二条康道(正室は後水尾院同母妹貞子内親王)ただ一人であったという。近衛尚嗣はこれを二条康道から伝え聞いたのであるが、また権大納言中御門宣順はその「宣

順卿記』に、後水尾院は数年来落飾の希望を抱いていたが徳川三代將軍家光が同意せず実現できなかった。それが家光の死を機に突如実行されたものだと伝えている。家光は四月二十日に歿している。わずか半月後のことであった。

後水尾院は禅宗の、ことに一絲文守<sup>3</sup>(二六〇八一―六四六)・龍溪性潜(一六〇二―一六七〇)に深く帰依した。一絲は後水尾院の生母中和門院に近侍した岩倉具堯の三男で、一絲も元和元年(二六一五)八歳で中和門院に仕えたが同七年に辞し、寛永三年(二六二六)真言律の楳尾山西明寺に入寺し賢俊良永のもとで得度し文守を称した。同四年沢庵宗彭を慕って臨済に転じ、同六年出羽上山配流の沢庵に随従したが、同七年一人京に戻り洛西西岡に閑夢庵を結んで後水尾院の同母弟近衛信尋らと交流し、持戒禅を提唱して後水尾院から便殿に招對を受けた。同九年丹後国九路峯に桐江庵を結んで隱棲したが後水尾院はしばしば招請し、同十五年には病弱な一絲のために西賀茂に靈源庵を建てて住持させた。同二十年八月近江国神崎の瑞石山永源寺に晋山し、その中興に尽力したが正保三年(二六四六)三月十九日三十九歳で早逝した。永源寺は寂室玄光(正灯国師。一一九〇―一三六七)が近江守護六角氏頼の帰依を得て開山した古刹であるが、当時の住持空子元晋が一絲を訪ねて荒廢を訴え中興を懇請したのだった。なお一絲は永源寺に入山直後、同国日野の法輪山正明寺の再興を後水尾院の第一皇女文智女王の侍女義峰尼を介して依頼され、それを応諾している。義峰尼は一絲の弟子で、正明寺には当寺再興に関し一絲が義峰尼に宛てた懇切な書簡<sup>4</sup>が伝わる。後水尾院の一絲に対する帰依心は深く、三十年忌には国師号定慧明光仏頂国師を幕府の承諾を得ず内々に授与していたが、三十三年忌には京都所司代戸田忠昌を通じて幕府の承諾を得、これを公のものとしている。

龍溪性潜は京都の人で、慶長十四年(一六〇九)八歳で東寺に入って真言密教を学び、元和三年(一六一七)十六歳のとき撰津国臨濟宗慈雲山普門寺で出家し、龍安寺伯蒲慧稜に參禅して龍溪宗潜を称し、慶安四年(一六五二)五十歳で妙心寺住持に就き紫衣を賜った。その後普門寺に退隱したが、承応三年(一六五四)隱元隆琦が来朝すると弟子となり、宇治黄檗

山萬福寺の建立を助け開宗に尽力し、寛文三年(二六六三)隱元から印可を受け諡号を性潜に改めた。同四年一月命ぜられて後水尾院の勅願寺近江日野の正明寺住持となり、同九年四月には隱元から源流法衣を受け、和僧として初めて隱元の正式な嗣法者となった。同十年八月二十三日撰津国九条島の靈龜山九島院の齋会に請ぜられたとき、折からの暴風雨と高潮のため寺は水没したが避難せず、禅堂に坐したまま湮没した。世寿六十九。

寛文元年(二六六一)龍溪らの奔走によって黄檗が開立されるに及ぶと、同三年五月二十三日、後水尾院は龍溪を仙洞に請じて隱元の禅要を問うている。これが後水尾院の黄檗帰依の始まりとされるが、萬福寺建立の地は後水尾院の生母中和門院の別邸大和田殿であり、もともと後水尾院と黄檗の因縁には深いものがあつた。同七年十一月七日、後水尾院は龍溪の法を嗣ぎ、龍溪の黄檗禅における唯一の法嗣となったが、後水尾院と黄檗の結びつきは後水尾院の龍溪への帰依心から生じたことであつて、すでに明暦三年(一六五七)には龍溪の講説を聴聞し、大宗正統禅師の勅号を下賜している。

光子内親王は後水尾院の傍らで暮らし、その影響を受けて仏道に傾倒した。幼いころから三宝を敬う天性精勤な性質で、「常侍帝側聽禪要好静坐」という日常を、法華經を受持し労を厭うことなく倦まず弛まず書写に精勵したと『行業記』は伝えている。内親王は三十二歳の折の寛文五年(一六六五)十一月八日、内院において龍溪から菩薩戒を受け、以後龍溪への帰依と正明寺の庇護を怠らなかつた。元禄七年(二六九四)後水尾院十七回忌には大藏經と経藏を施入し、宝永元年(二七〇四)二十五回忌には自ら書写した法華經普門品を奉納し、享保元年(二七一六)には法華經読誦数が一万一千部に満ちたとして法華宝塔を建立施入している。正明寺は五代住持寂門道律の代に寺觀が整えられたが、それは内親王の寂門への帰依心によるものであつて、実は寂門の住持位就任は内親王の指名であつた。

寂門道律(一六五一―一七三六)は近江国日野の人で、寛文七年(二六六七)十七歳のとき西国三十三所を巡礼し、翌八年正明寺龍溪性潜に謁して侍者となった。諸国諸山を遊歴し、近世律三僧坊のひとつ河内国青龍山野中寺を董し近江国東方山安養寺を開山した戒山慧堅(一六四九―一七〇四)

から律を学び菩薩大戒を受けた。天和二年（一六八二）、かつて師龍溪の塔所であった黄檗山内塔頭萬松院の住持となり、元禄三年（一六九〇）七月には黄檗山四代獨湛性瑩から隠元の隠棲所であった松隱堂の堂主を命じられ、同五年には天王山仏国寺高泉性激に請じられて戒経を講じ副寺に指名された。しかし半年で辞して故郷に戻り、五個莊清水鼻の瑞雲山慈恩寺を中興開山し、また野洲郡橋村長田氏寄進の瑞泉山宝覺寺に止住した。夏は慈恩、冬は宝覺で礼仏・誦經三昧の日々を送ること二十年、享保三年（一七一八）二月光子内親王に請ぜられて正明寺五代住持となった。その時期は明確ではないが、妙幢淨慧が依止して律を学んだのはこの寂門道律であった。

延宝八年（一六八〇）八月十九日に後水尾院が八十五歳で崩御すると、光子内親王はその二ヶ月後の十月十九日、同母弟性眞法親王（一六三九—一六九〇）の住持する嵯峨山大覚寺に入寺し、靈龜山天龍寺三秀院長老天外承定を得度師として落飾出家した。四十七歳の時である。道号照山、法諱元瑤の法名は黄檗山第五代高泉性激から授与された。なお三秀院は後水尾院と因縁深く、本尊東向大黒天は後水尾院勅願の嵯峨人形である。

落飾して内親王は照山元瑤を称し、嵯峨一燈菴に蟄居して如法に齊戒清浄を精修する日々を送ったが、一方閑居の地として修学院離宮内楽只軒を改めて小堂を新創し、智証大師円珍作の觀世音菩薩像を安置した。天和二年（一六八二）三月二十五日、導師に東山泉涌寺中新善光寺の孤雲正瑞長老を招請し、衆僧を屈請して落慶法要を執行した。『行業記』によれば法用は理趣三昧によって行われ、新創の小堂には聖明山林丘寺の寺号が付されたが、それは後水尾院の命名であった。内親王が早くから出塵の志を抱いていたことを知っていた後水尾院は、ために楽只軒と林丘寺の寺号をあらかじめ賜っていたのである。なお鐘樓の鐘銘は高泉性激に請じた。

新創されたばかりの林丘寺を博識の儒医黒川道祐（一六三三—一六九二）が詣っている。その『北肉魚山行記』に、

天和二年四月十八日、大原山再遊ノ志アリ、味爽白雲村ヲ出テ、禁門ノ前ヲ北ヘ、今出川ヲ東ヘ、糺ノ森ヲ西ニ見、出テ在家河原村ヲ過ク、此所ノ氏神

祭九月十五日ト也、是ヨリ山鼻村ニ至ル、凡ソ此邊ノ七郷ハ天皇祭ニテ三月五日也、此村ノ中淨土宗理即院ノ前ヨリ先ツ東ノ方ニ行キ、曼珠院親王ノ寺ヲ南ニ見、林丘寺ニ赴ク、門ニ酒肉五辛ノ禁牌アリ、是レヨリ石階ヲ歷本堂ニ到ル、本尊ハ正觀音也、大津浦池田某ノ家ヨリ此處ヘ移シ玉トナリ、東ノ方ニ、後水尾院畫像アリ、妙法院宮堯恕親王ノ御筆也、御賛ハ御自製ニ首ノ御歌色紙形ニ被染宸筆、西ノ方ニ初祖達磨圓覺大師ノ一幅ヲ掲ラル、隱元和尚ノ筆ナリ、後水尾院皇女朱宮、日比此ノ所ヲ御取立アリ度御有増、後水尾院崩御、後御髮ヲオロシ玉ヲ、照山元瑤ト御名ヲ改メラレ、此寺ヲ經營アリ、林丘寺ト御名付、供養ハ泉涌寺ノ中新善光寺孤雲執行セラル、御宗門ハ禪ニ御心ヲ傾キ玉フニヨリ天龍寺三條院定西堂ニ御歸依、此ノ寺ノ住持ノ分ナリ、境地丘陵ニ松杉シケレリ、依之號林丘寺、堂ノ西ニ鐘樓アリ、鐘ノ銘ハ黄蘗派佛國寺住職高泉ノ作ナリ、林丘寺鐘ノ銘并ニ引

天和元年 光子内親王就台山之下立梵宇曰林丘一爲重修祝國之場、明年春、規紀稍定、思欲普利幽顯、乃簡赤金一範鐘一口、重九百斤、徵曇花道人一爲銘、台阜之麓、有古刹幢、久而荒廢、今復重隆、乃占晷氏一範此金鐘、以考以擊、厥音無窮、下資冥界、上祝堯風、普願聞者、均證圓通、天和元年成道日、支那沙門性激高泉拜手敬撰、

毎月十八九日本尊開帳アリトテ諸人參詣ス、堂ノ西北ニ御壽塔アリ、北ニ御局大藏卿ノ壽塔アリ、御住菴ノ堂ノ西、松竹林中ニ見ユ、此處ヲ出テ後水尾院修學院ヲ經、御在世ノ中ハ春秋兩度ノ大御幸、其ノ間ニ風花雪月折ニ觸レ時ニアタリ、屢御幸ヲ催、草木山河自光ヲ増シ榮ヲ競フ、今ハ昔ニカハリ御幸ノ路モ草最トシケリ、露藜蕪タル有様不覺涙ヲ催セリ、

と記し、さらに大原への道を進むのだが、道祐の見聞は丁寧で、一文に引くと天和元年仏成道十二月八日付曇花道人すなわち高泉性激の鐘銘によって、照山元瑤が落飾後一年にして林丘寺の寺觀を整え、毎月十八、九日には本尊を開帳して衆庶の參詣を許していたことが知られて興味深い。『行業記』が「觀音大士像此像智證大師所造也靈驗最著別有記」と伝える本尊について、これが大津浦石田某家から移坐されたものだと記し、「靈龜山天龍寺三秀院長老天外承定」

への帰依を天龍寺三條院定西堂と記すなど小異も存するが、堂内外の荘嚴を細かく伝えていることから、道祐の大原山再遊の志のうちには新剎間もない林丘寺探訪の意図があったことは容易に推量できる。

照山元瑤は天和三年願を發して長三寸余の觀音塑像の製作を始めた。これが世にいう檜葉觀音であるが、『行業記』の記述からするとその塑像は、乾燥させた檜葉に觀音宝号を書し、これを刻砕粉末にして泥土と混ぜ合わせ、さらにこれに膠・香料を練り込んで七寸余の塑型に入れて成形したものと推量される。元瑤は皇族の忌辰には必ずこの觀音塑像を施入して追薦したといい、また求める者があれば一軀ずつ下賜したがその数は知れぬほどであったという。加えて元瑤は大黒天の小塑像も製作した。それは生母逢春門院が元瑤を懐胎の折、金殿で大黒天の小木像を拾ったことがあり、もとの持ち主を尋ねたが分からなかった。それでこれを胎児の守護神だと解して以来祀ってきたのだという。「此天尊奇瑞載在別記」というから、元瑤は幼いころから大黒天の靈驗を信じていたのである。『行業記』によれば宝永四年（一七〇七）臘月二十七日、元瑤はわが心身の安心坦蕩たる福は大黒天の冥祐によるものであって、だからこそ「是故塑斯天以施與人也。願世人信此天亦各有獲福利矣」と笑みを含みながら語ったという。短いことばながら元瑤の本意を知ることができる。塑像は作り続けられていたのである。

おそらく林丘寺を新剎する以前から元瑤は慈善救済に意を尽くしていたものと思われる。『行業記』にはその時期の明記はないが、凶年に当たって貧民飢人を救済し、棄児を育てたという記述があり、また貞享元年（一六八四）六月の早魃には百尺の井戸を鑿って田家の水争いを鎮めたと伝えられている。そうしたとき元瑤は経句や仏菩薩の宝号を書し、觀音像を描いては求める者に授与しているのであって、発願して檜葉觀音や大黒天小塑像を製作したのは、それが慈善救済の経済的な資を得るための営為でもあったと諒解でき、元瑤の慈悲心の深さに思い至るのである。ややもすれば元瑤の書画や檜葉觀音等々の遺品が芸術的に優れたものであるとして、元瑤の営為をそうした視点のみから云々するむきが少なくない。しかし元瑤は黄檗禪における、たとえば了翁道覚や鉄眼道光の慈悲行を知っていたはず

であり、交友する高泉性激・龍溪性潜・寂門道律等々も了翁や鉄眼に近しい黄檗の禪僧たちであって、元瑤の行実には黄檗僧たちの慈悲行・孝行が影響していたであろうことは忘れるべきではない。元瑤は貞享二年（一六八五）五月二十二日生母逢春門院が薨すると、志を決して蘭若に休居し、麻衣布衫を着して昼夜寸陰を惜しみ、病むことがあっても懈怠せず法華經の書写に精勵した。この一夏九旬の服忌精修は「竹柏之操慈孝之誠」として多くの人の知るところとなったが、その孝心は黄檗四代独湛性瑩のそれに重なる。

正徳五年（一七一五）秋、妙幢淨慧は林丘寺に遊んで七律一首を詠んだ。

乙未之秋遊林丘寺有感偶題

靈境沙清趣轉濃 飛泉添響古松風

京華塵到邊際尽 台嶠路從蕃外通（『儒積雜記』卷五十九）

淨慧と元瑤の交流が生じた時期や契機は明らかではない。もし兩人を結ぶ仲介者があったとすれば、黄檗の高泉性激・龍溪性潜・寂門道律をはじめ訳語僧齊雲道棟（一六三七―一七二三）・画僧卓峰道秀（一六五一―一七一四）等々の名を容易に挙げるができる。齊雲道棟は豊後府中の人で、唐語を解したことから隱元の侍者として重んじられた。道棟は延宝四年（一六七六）の夏四句を修学院離宮樂只軒单丁菴に寓居したことがあり、その折、ひたすら仏道修行に精進し、大悲尊像を描いては信心の男女に施与する元瑤内親王の純一な自利利他業を目の当たりにして感動し、ために唐宋元明及び渡来黄檗僧の觀音讚を編輯して『讚觀音大士伽陀集』を製し、これを内親王に奉獻した。卓峰道秀は西本願寺絵所徳力家の出で、宗を転じ高泉の弟子となって常随した。画筆をもって知られ、元瑤内親王との合作もあり、内親王の絵の師匠と目される人である。また他宗を見れば持戒念仏を提唱した鹿谷法然院の信阿忍激（一六四五―一七二一）を挙げ得る。

『獅谷白蓮社忍激和尚行業記』（巻下）元禄五年（一六九二）条に「魁節期<sup>一</sup>西歸<sup>二</sup>。謁<sup>レ</sup>師。稟<sup>一</sup>受淨宗眞訣。日課<sup>二</sup>佛號。凡數萬聲晝夜六時。孜<sup>二</sup>孜淨業。一<sup>一</sup>其節。潔白如永雪。婉柔之姿。殆有數然烈丈夫之風也。」とあり、元瑤は「獅谷第一大護法」であった。淨慧は元禄三年（一六九〇）に執行された地藏菩薩像

の開眼供に慶賛導師として招請されている。忍激が兩人の仲立ちであったとしても不思議ではない。忍激の外護者の一人に伊勢松坂の豪商中川常宇（二七二四没）があった。常宇は淨慧とも元瑤とも交流があり、淨慧は正徳六年（一七一六）八月、常宇の依頼で常宇所蔵の茶瓶についてその由来を伝える一文を草しており、元瑤もまた享保五年（一七二〇）秋、常宇の依頼を容れて伊勢宗安寺の額字を書いている。この宗安寺額字のことを淨慧は『儒釈雜記』卷四十七に、

勢州宗安寺額背之誌

此宗安寺之三大字者普明院法内親王之御筆也

聞説フ頃年以ニ老徳ニ之故ニ自禁シテ揮ニ玉毫ヲ矣、然常宇因ニ淨業之前縁ニ得間謁スルコトヲ尊顔于函丈ニ、一日偶爾トシテ手書シテ此三字ニ而□ヲ焉、抑謂「斯宗安寺」者、乃常宇先祖之所ニ宮建スル也、而今忽題ニシテ標榜ニ、蓋シ是願應啐啄之所ニシテ致、而格外之法榮也、于肯法筭八十有七、享保第五庚子仲秋上浣也

恭惟是則、後水尾院之皇女、其始在ニ禁辰一時ハ稱ニ緋宮御諱光子ト、自厭ニ畢入ニ空門ニ、創開ニ林丘寺ニ灑然安居焉、更ニ号ニ照山玄瑤ト、直至ニ于老老至之今ニ、修勤猶不弛ハ玉ハ、可レ謂ツ人中芬陀利華也ト

と、常宇の先祖が宮建した宗安寺は願すれば啐啄にして応ずる、並はずれて仏法繁榮の寺院であると記し、老徳ゆえに揮毫するなどのことを自ら禁じていた普明院元瑤法内親王が寺額「宗安寺」の三文字を大書したのは、内親王は常宇と間々謁する間柄であり、そのうえ二人には「淨業之前縁」が存した故だと伝えている。

宝永四年（一七〇七）十二月二十一日、靈元天皇第十皇女龜宮（二六九六一七五）が十二歳で林丘寺に入寺すると、元瑤は自ら戒師となつて得度せしめ元秀の法諱を与え、即日林丘寺を譲つて普明院を称した。退隱後の元瑤に額字を依頼し得た常宇は松嶺元秀尼の父帝靈元院に謁するなど公家と交流し、また一方では近江日野の木食澄禪（一六五二―一七二二）に帰依して妻・一女とともに出家し、澄禪を木食彈誓開基の古知谷光明山阿弥陀寺に請じた人である。元瑤はこの阿弥陀寺とも交流があったのであろう。

安永五年十月四日、林丘寺三世博山元敞尼（一七五〇―一七九七）は初代元瑤尼の五十回忌辰の追薦廻向を阿弥陀寺に依頼している。このことは木食僧が皇族をはじめ貴顕の帰依を受けたことを証し、同時に元瑤の人的交流網の広さと深さを伝えている。黒川道祐の一文から知られるように、元瑤が新創した林丘寺は毎月本尊を開帳し、不意の参詣も拒んでいない。齊雲道棟は寺内に寓してもいる。これを経営した元瑤は井を掘り棄兒を養育して慈善に励み、書画や檜葉観音・大黒天塑像を製してはこれを施与して徳化に努めている。通説では『行業記』に據るとして元瑤は千点以上の観音像を描き、三千点の檜葉観音を創り、生母逢春門院の亡後は寺を出ることなく読経や写経をして過ごしたと説明されるが、しかし『行業記』は書画や塑像の実数を示してはおらず、生母歿後の元瑤が寺を出ることなく静修の生涯を送ったという記載は存しないのであって、元瑤の行実とその林丘寺が今日の門跡尼寺のあり方とは大きく異なるものであったことは注意しておいてよい。還暦を過ぎた淨慧は右の一文の最後に、この年八十七歳になる元瑤を人中の芬陀利華といふべき人だと敬意を極めて讚評している。

〔注〕

- 1 書陵部蔵本は撰者自筆と思われる。守拙齋明山は齊雲道棟編輯『讚観音大士伽陀集』（宝永四年）に題辞を寄せた落下散人守拙齋木貞、宝永五年辻勘重郎版『京うちまいり』の撰者守拙齋と同一人であろう。
- 2 『応円満院基熙記』『近衛尚嗣公記』『宣順卿記』は未見。久保貴子氏『後水尾天皇一千年の坂も踏みわけて』（二〇〇八年三月、ミネルヴァ書房）の解説に據る。
- 3 一絲文守・龍溪性潜・寂門道律の略歴は『正明寺小志』（一九二九年十月、正明寺編刊）に據る。
- 4 『正明寺小志』に翻刻本文が載る。
- 5 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光氏編著『黄檗文化人名辞典』（一九八八年十月、思文閣）「龍溪性潜」項に據る。なお隠元への国師号下賜は『行業記』に「此専依尊尼之所奏也」と光子内親王の進奏によるものと伝える。
- 6 京都市左京区一乗寺葉山町所在臨濟系単立一燈寺として存続する。同寺は通称葉山観音。葉山中腹にあつて三面馬頭観音を祀る。
- 7 上村觀光編『近畿遊覽誌稿』（一九〇四年、平安考古会）所収本文に據る。

8 『讚観音大士伽陀集』二巻を光子内親王の撰述とする説明が蔓延するが、訳語僧齊雲道棟が延宝四年（一六七〇）夏に修学院離宮楽只軒単丁菴に寓居して草稿し、さらに晩年双丘仁和寺門外の片口氏草堂を住菴として宝永四年（一七〇七）春に完成したもので、同年林丘寺から版行された。活字刊本がある。足立喜六翻訳及註解・熊平源藏編輯兼發行『讚観音大士伽陀集』（昭和八年（一九三三）十一月、廣島觀音會）。

9 「浄土宗全書」第十八巻（昭和六年（一九三二）五月、浄土宗典刊行會）所収に據る。

10 三重県多気郡明和町斎宮に浄土宗宗安寺として存続する。『齋宮村郷土讀本』（昭和十年（一九三五）三月、齋宮商工會編輯）によると、宗安寺はもと宇治山田仲之町に三縁山増上寺第二十一世業誓空脱が正保四年（一六四七）に開山したもので、行基菩薩作の二尺七寸の阿弥陀如来を祀り、空脱の徳化で檀信徒も多かったが、明治元年（一八六八）宇治山田が全国に先駆けて敢行した廃仏によって廃寺となった。しかし二十一代本多進海が熱烈な復興運動を展開して明治二十一年（一八八八）四月に齋宮村中西の稱名寺跡地に再建したと伝える。現在、当寺は淨慧が記したような所伝を失っている。なお松阪市中町所在浄土宗三縁山清光寺は中川家の菩提寺で、中川家初代浄安以下一族の墓所がある。

11 宝曆二年（一七五二）久世兼由撰『松阪權輿雜集』巻之四「職人町諸家之事」に「中川清右衛門法名浄安、二代清右衛門法名浄故、三代清三郎法名浄宇、清水谷家の門弟にて歌道を好」（桜井祐吉編『校本松阪權輿雜集・地』大正八（一九一九）年二月、三重縣史談會）とあり、桜井祐吉「國寶元曆万葉集に就て」（『松阪文藝史』所収、昭和十二年（一九三七）二月、桜井秀夫刊）に、國寶元曆万葉集は中川家の秘藏書で、浄宇（常宇）が清水谷谷卿の門下であったので「清水谷谷卿の手を経て靈元天皇の叡覽に入りしなり」という。清水谷谷卿こと清水谷実業（一六四八―一七〇九）は靈元院歌壇の中心的歌人だった。常宇は実業を通じて靈元天皇（一六五四―一七三二）に親近する機を得たのである。

12 阿弥陀寺十世信阿宅亮撰『當山諸記録撮要并靈簿之所由』（写本一冊、宮島（コレクショ）ン蔵）に據る。なお博山元敏尼は東山天皇の第六皇子閑院宮直仁親王の第八王女八千宮。宝曆十二年（一七六二）三月十八日入寺得度。同年九月七日三世就位。（関口）

〔翻刻凡例〕

- 一、名古屋大学図書館蔵『佛神感應録』後集を底本とした。同図書館に謝意を表す。
- 一、可能なかぎり原文の表記を尊重し、明らかな誤刻もそのまま翻刻した。ただし、「未・末」「己・巳・日」等の混用表記は文意をとって適字を置き、「一」（コト）等の合字は通行の表記に改め、摺墨の濃淡等による判読不能の文字は字数分の空格（□）を置いた。
- 一、半丁ごとに丁数を示し、各話末行と次話題との間に空行を置いた。



抱子観音像 照山元瑤筆  
大慈山西明寺藏  
『特別展永源寺の歴史と文化』（栗東歴史民俗博物館、2003年10月）所載



白衣観音像 照山元瑤筆  
池田市立歴史民俗資料館蔵  
『特別展池田文化と大坂』（池田市立歴史民俗資料館、1992年10月）所載